

# 保育者の保育観に関する研究動向

Research trend of nursing teacher's view on childcare

松本 佳代子

Kayoko MATSUMOTO

## 1、本研究の背景

保育者は、日々の遊びや生活を通して子どもの健やかな成長を育くみ援助する役割を担っている。その援助の背景に保育者の保育における見方・考え方である保育観が存在している。

津守 (1998) は、保育者には「自らの主体性をもって判断し、決断すること」が求められ、その為には、「潜在的・内的力を駆使する知性と勇気」が必要であると述べている。芦田、秋田他 (2006) は、保育者の保育における日々の判断は、「保育者の持つ保育観と実践的知識や技能が働いている」とし、それらは、「通常明示的に意識化されているわけではなく日常の保育の中で暗黙的な実践知として保育観は実践を規定している」と述べている。さらに増田、小櫃 (2014) は、「保育者は保育の中で様々な出来事を受け止め瞬時に判断し展開している」とし、予想外の出来事への対応は、保育において重視され、その瞬時の判断は保育者の専門的な知識と経験がもととなり、その基盤となるのが保育者の保育に対する見方、考え方である保育観が大きく影響している。と述べていることから、保育者の保育観は日々の保育における瞬時の判断や子どもへの援助方法、声かけ等を決定する大きな要素であると考えられる。

保育者の保育観について、過去の研究を概観すると、学生を対象にした研究 (児島・高杉 2003、佐藤 2011、井口・金野 2013、他)、保育者

を対象にした研究 (榎田 2017、佐藤 2017 他)、保育者の保育観を保育士、幼稚園教諭と職種別に分析した研究 (小原・入江他 2013、中 1996、他)、保育観の形成過程を分析した研究 (梶田、杉村他 1990、増田・小櫃 2014、藤木・上田他 2011 他)、保育観と省察との関係性に着目した研究 (鳥光・中坪他 2000)、また海外と日本の保育観の比較研究 (劉・倉持 2010、2013、2014、芦田・秋田他 2006) など、様々な角度から研究が行われている。

しかし、保育者の保育観の内実を見ると「保育観」の言葉の捉え方、定義が様々である。「保育観」の意味を現職保育者に質問すると、ある保育者は「このように育てたいという保育に対する人それぞれの思いや保育に対して持っている考え、正しいと思っていること」と答え、「保育をする上で、どのような関わり、対応が良いのかと言った保育者の価値観、理念」と答える保育者もいる。さらに「保育をする上で一番大切にしている根っこの部分、保育に対する感性、感覚と捉え、社会が変わると保育観も変化する」等、保育の実践者である保育者は「保育観」という言葉を個々様々に理解し保育に臨んでいることがわかる。

山本 (2017) は、幼児教育・保育の基本である「保育所保育指針」・「幼稚園教育要領」・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」に触れ、これらの中に「保育観」という語句は載っていないとしている。

では、辞書「大辞林」から『観』のもつ意味を調べると（接尾語に用いて）～に対する考え方、見方の意を表す。と書かれている。これにあてはめて「保育観」の言葉の意味を考えると、保育に対する見方、考え方となる。

これらを踏まえて保育観の定義について過去の研究論文を概観すると、梶田・杉村他（1990）は、保育観を「保育の見方・考え方」と定義した上で保育者は、どのような経験を経ながら保育についての見方・考え方を形成したり、発展させたりするようになるかその過程を明らかにしている。この中で保育者の持つ見方・考え方はその人個人の成長・発達のプロセスと深いつながりがあるのではないかということの問題意識とした。すなわち保育者の現在の保育観は、それ以前の様々な体験に影響を受けていることが考えられるし、保育者自身の家庭生活においてどのような体験をしたかによっても影響を受けるだろうとし、さらに遡れば、その人が乳幼児期から青年期に至る発達の過程で経験したことともかかわりがあることを示唆している。森上・大豆生田（2006）は、保育観について「子どもが発達するには、どのような保育をするのがよいか考えていること」と子どもの発達を捉えることと保育の見方・考え方を保育観と定義している。さらに山本（2017）は、「保育観」とは「保育に対する観念・信念」であり、つまり「保育に対して保育者自身が持っている考え」や「正しいと思っていること」を指すとし、学生に望ましい保育観を修得させることは保育者養成において重要事項であるとしている。

中（1996）、渡邊・永利（2017）は、「子どもの認識観、発達観、指導観、保育内容観、保育者の人生観等保育に含まれる観念形態の総称である」と定義した上で、保育者の保育観について論じている。

ここから研究論文においても、保育者の「保育観」の捉え方は様々であることがわかる。保育者の保育観という言葉の持つ意味、前提が揃っていないということを鑑みると、筆者それ

ぞれが主観的に保育観の意味を定義し論じていると考えられる。保育観は、保育者が保育をどのように捉えているのか。保育に対する見方、考え方、また何を大切に、重視した上で保育に臨んでいるのかという、保育者の保育行動の根幹部分であるとも言える。この保育行動の根幹とも考えられる保育観の定義が一定でないと思えば保育を考えるという行為を行う際、保育者それぞれの思いで保育を語ることになる。保育を深めていくということ、保育の質を考えていくという点からも「保育観」の意味内容を考えていくこと、さらには「保育観」という言葉が持つ意味を再考することは意義のあることであると考えられる。しかし、保育者にとってあまりに当然のこととして捉えられている事象の場合、改めて言語化することは困難であることも考えられる。保育者養成という立場から保育者の保育観を考えても先にも述べたように、保育観の前提が多様であると保育を考える際の糸口が定まらず研究そのものの積み重ねも難しいことが考えられる。

## 2、研究目的

本研究の目的は、保育者の保育観に関して1989年～2018年までに発表された研究を検討し新たな分析課題を指摘することにある。幼稚園教育要領および保育所保育指針の改訂は、1989年以降、約10年おきに告示および施行されているが、社会の変化や環境の変化は保育者の保育観やその形成過程に影響を及ぼしているのではないかと考え1989年以降2018年までの研究論文を検討することを目的とする。

## 3、研究方法

保育観の研究論文（学会の発表要旨、雑誌記事を除く）を対象に電子ジャーナルデータベースCiNiiを使用して文献検索を行った。保育者の保育観に関する研究に関連する文献検索のキーワードは、「保育観」「保育者」「保育士」「幼稚園教諭」「経験年数」「形成過程」などのキー

保育者の保育観に関する研究動向

ワードを用いた。その後、検索で上がってきた論文の内容を通読し、本稿のテーマに沿った論文を選び出してリストアップした。その結果、

31本（表1参照）の論文を今回の分析の対象とし、論文の中から保育者の保育観の定義の捉え方を抽出し、それに沿って分析を行った。

表1

著者名	論文タイトル		年	保育観の定義	内容
梶田正巳、杉村伸一郎他	保育観の形成過程に関する事例研究	名古屋大学教育学部紀要	1990	2	2つの事例を提示し、事例に対する指導の仕方からそれぞれの保育者がもっている指導の考えからを検討し、さらに保育者自身の個人史を語ることによって保育に対する考え方を明らかにしようとした。
				定義	保育についての見方・考え方
中 俊博	保育者の保育観－幼稚園と保育所の比較から見た	和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター	1996	4	幼稚園教諭と保育士の保育観について、梶田らの保育観の尺度5因子25項目より保育観の特性、経験年数と保育観について調査。
				定義	子どもの認識観、発達観、指導観、保育内容観、保育者の人生観等保育に含まれる観念形態の総称である。
鳥光美緒子、中坪史典他	保育観の意識化とそれに果たすカンファレンスの役割	広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要	2000	2	定期的に行われる研究保育後のカンファレンスを通して保育者が自らの保育を「内省」し「意識化」し、それによって保育観を高め合い変化することを明らかにした。
兎島雅典、高杉展	学生の保育観の変容と授業構想	松山東雲短期大学	2003	1	アンケートにより入学時の学生の保育観を調査し、入学して卒業までの学生の学びの過程を知り科目との関係性や学生の学びのモデルを想定しようとした。
綿貫由季子、武藤安子	高校生における保育観の形成とそれに影響を及ぼす要因－自我発達との関連で－	日本家政学会誌	2004	1	高校生の保育に対する意識や態度を「保育観」と定義して調査し、保育観に関する3因子「情緒的保育観」「社会的保育観」「条件的保育観」を明らかにしている。
				定義	意識や態度
田甫綾野	保育実践者の保育観や「構え」はどのように形成されたか－ある保育者のライフストーリーを通して－	日本女子大学大学院紀要	2005	3	インタビューにおける語りを通して保育者の保育観や「構え」は人生における様々な経験を通して形成されるものであり、幼稚園教育要領などの制度によって自らの保育観や「構え」を形成しているのではない。自らの被教育体験から教育実践への体験の中で一貫性をもって位置付けていることを明らかにした。
				定義	保育の考え方や保育実践だけでなく個人的な体験や自己のパーソナリティに関すること、人間性に至るすべてが保育に収められている

著者名	論文タイトル	年	保育観の定義	内容	
芦田宏、秋田喜代美他	多声的エスノグラフィ法を用いた日独保育者の保育観の比較検討—語頻度に注目した実践知の明示化を通して—	日本教育方法学会紀要	2006	2	多声的エスノグラフィの手法によって、日本、ドイツの保育者の暗黙的な実践知として作用している保育観を明示化し比較検討した結果、3つの共通点を見出した。
				定義	暗黙的な実践知として作用している、実践知の中心部分
吉岡一志	保育士の成長を支える信念の形成過程	広島大学大学院教育学研究科紀要第三部	2007	2	幼稚園、保育園が提示する価値観が多様化している中で、保育者は多様化した保育観をもつ職場に適した力量形成が求められる。実践のなかで信念を再構築しながら成長していくことを明らかにした。
奥山順子	保育者の資質としての「遊び」理解—保育者の「語り」に見る保育観形成過程—	秋田大学教育文化学部研究紀要	2008	2	平成元年の幼稚園教育要領の大幅改訂を経験した保育者は、自らが保育者として安定してきた時期の改定を保育者たちがどのように受け止め自らの保育観を実践を通して構築したのか保育者の語りから明らかにしている。
劉海紅、倉持清美	日本と中国の保育者の保育観	東京学芸大学紀要、総合教育科学系	2010	1	日本と中国の保育者はいざこざの意義として協調性が育まれたりコミュニケーション能力が養われることを認めているが、いざこざの介入場面では、それぞれ異なる見解を示していることが明らかとなった。
佐藤智恵	保育者養成校で学ぶ学生のもつ保育観に関する研究—取得資格による比較より—	幼年教育研究年報	2011	1	佐藤・七木田(2007)の幼稚園教諭用の保育観尺度を用いてアンケートを実施、幼稚園教諭免許と保育士資格の取得を目指す学生は、小学校教諭と幼稚園教諭免許取得を目指す学生とは異なる保育観を持っていることが考えられるとした。
藤木大介、上田七生他	認定こども園への移行が保育者の保育観に及ぼした影響	梅光学院大学論集(44)	2011	2	梶田らの保育観の尺度を参考に、認定こども園で働き始めた保育者の保育観がそれ以前と比較しどのように変化したか検討した。
田中浩二、大塚良一、福山多江子他	保育者の保育者と保護者の保育観に関する意識の比較—保育所と保護者に対する意識調査の結果から—	東京成徳短期大学紀要	2013	1	保護者と保育者が子育てを展開していくために何が必要か、保護者と保育士による子育てや保育または保育所に関する意識を調査し、比較分析した結果、意識の乖離は大きく3つに分けられる。
劉海紅、倉持清美	いざこざを通してみた中国の都市部と地方部の保育者の保育観	東京学芸大学紀要、総合教育科学系	2013	1	地域格差が問題視されている中国の幼児教育において、いざこざについての保育者の意識を上海と咸陽で比較し、両者ともいざこざを通して子どもに問題解決能力が身につくとしたが、解決方法として直接介入をとる保育者は咸陽の方が多いたことが明らかとなった。

保育者の保育観に関する研究動向

著者名	論文タイトル	年	保育観の定義	内容	
小原 敏郎、 入江礼子他	保育者の保育観に関する研究－保育経験年数、保育所・幼稚園の違いに着目して－	保育者養成研究	2013	1	幼稚園教諭と保育士のもつ保育観について、幼稚園教諭は子どもの主体性や対人関係などの発達に関すること、保育士は、子ども理解や子どもの気持ちに寄り添うことを大切に日々の保育に臨んでいることを明らかにしている。
				定義	日々の保育の中であなたが特に大切に思っていること
湯浅阿貴子、 押谷由夫	幼児の規範意識の形成に対する保育者の保育観に関する一考察－「ずる」（自己欲求優先的行動）に対する認識からの検討－	学苑・初等教育学科紀要	2013	1	ルールが明確に存在する遊びの中での幼児の規範意識の形成に対する保育者の意識（保育観）に着目し、幼児の道徳的価値観の形成過程に保育者の価値意識がいかに作用しているか明らかにした。
				定義	保育者の意識
白石崇人	「幼児教育」の理論とその応用②保育者の専門性とは何か	社会評論社	2013	3	保育者の倫理について、保育をする上での判断基準であるとして、この倫理を保育観としている。保育観と保育倫理は直接結びつき価値観とも深い関係にあり、ある程度普遍的なもの捉えている。
劉海紅、倉持清美	中国都市部と地方部の保育者の保育観	東京学芸大学紀要、総合教育科学系	2014	1	中国の都市部と地方の保育者の保育観の相違をインタビュー分析を行い、中国の保育者は幼稚園では仲間と遊びを通して学ぶことが多いという知見を共有する必要があることが示唆された。
増田まゆみ、 小櫃智子	保育者の成長を支える子ども観・保育観の変容－実習生との保育の省察の一事例から－	日本児童学会研究論文	2014	2	実習後の省察から見える保育者と実習生の保育観を明らかにし、実習生との省察が保育者の保育観の変容に繋がる可能性について考察する。
				定義	個々の保育者が形成してきた保育の見方・考え方
白井はる奈、 林悠子	対人援助者に求められる援助観：乳児保育における熟練保育士の語りを通して	社会福祉学部論集	2015	1	保育観を考え仲間と共有することの大切さを述べている。エピソード記述を通して同僚と検討する過程を通して色々な気づきを得る。職員がまとまる。保育に向かい力が湧く等の好ましい流れが生まれることを明らかにした。
				定義	保育者意識
森光義昭	社会の変化に対応した保育観の在り方	久留米信愛女学院短期大学研究紀要	2016	1	保育者が現代社会をどのように捉えているか、社会の変化がこの子どもたちにどのように影響しているか明らかにし、ここから社会に変化に対応できる保育観の在り方を明らかにしている。
				定義	保育者がどのように保育を捉えているか

著者名	論文タイトル		年	保育観の定義	内容
土橋久美子	保育観と保育実践：「自らの保育観を問う」とは	開花宣言、白百合女子大学児童文化学科	2016	2	自らの保育観の変化、そして守永英子の保育観を挙げ、心の中心を占めるものが入れ替わることによって保育の見方、考え方が変わるように思われるとし、保育観を問い直した瞬間があることを述べている。
				定義	どのような気持ちで子どもと関わるのか、どのような意識を持ち保育にあたるのか、保育に対しての見方、考え方
中村絃子	デンマークの森の幼稚園における保育観	お茶の水女子大学子ども学研究紀要	2016	1	森の幼稚園における保育観について、3週間にわたり参与観察を行い、森の中で起きる現象について自分たちにとっての意味を見出しながら森への理解を深めていくことに価値をおく保育観があることが明らかとなった。
山本佳子	保育者論が学生の保育観にどのような変化をもたらしたか	中国学園紀要	2017	3	保育者をめざす学生の保育観形成について、保育観に形成・変化を与えるものは、自分自身の親から受け継いだ生育歴が影響しているのか、あるいは専門的な学習により獲得したものなのか、対象者を縦断的に調査し変化を探った。
				定義	「保育に対する観念・信念」でありつまり「保育に対して保育者自身が持っている考え」や「正しいと思っていること」
岡林恭子、村松十和他	保育観の変容に関する一考察 —実習時のプロセスレコードとカンファレンスの分析から—	名古屋短期大学研究紀要	2017	2	実習中の学生と子どもとの関わりのプロセスとカンファレンスの結果を分析し、直接的な子どもとの関わりの中で、保育を振り返りながら保育観を広めたり深めたりしていくものであることが明らかとなった。
浅井かおり、浅井拓久也	保育士の保育観形成過程についての一考察 —TEM図の分析を通して—	未来の保育と教育—東京未来大学保育・教職センター紀要—特別号	2017	2	TEMを用いて、インタビュー調査より保育者の現在の保育観に至るまでのプロセスを明らかにすることを目的とした結果、保育者が感じる責任感が保育観の変容の一因であることを明らかにした。
渡邊望、永利陽一	保育観による保育行動の違い	九州女子大学紀要	2017	4	平成29年3月に告示された幼稚園教育要領に触れ人的環境としての保育者の保育観が保育行動にどのように影響を与えているのか、梶田らの保育観の尺度を用いて調査した。
				定義	子どもの認識観、発達観、指導観、保育内容観、保育者の人生観などを含むものである。

保育者の保育観に関する研究動向

著者名	論文タイトル	年	保育観の定義	内容
榎田二三子	2歳児保育における幼稚園教諭の保育観に関する一考察 武蔵野教育学論集	2017	1	幼稚園での2歳児保育・未就園児保育についての幼稚園教諭の保育観を明らかにし、2歳児の実態に照らし合わせ課題を検討し、実態を捉えた年間指導計画の必要性と保護者支援の必要性と3歳未満児の保育の特性についての理解を図ることを明らかにした。
佐藤智恵	保育者は、保育実践において何を大切にしているか 福祉臨床学科紀要	2017	1	3名の保育者が実践の中で大切にしていることを語りより分析を行い、他園や同僚といった「他者」と自らの保育実践を比較することによって自らの「保育観」が浮き彫りになることがある等を明らかにした。
			定義	保育者がどのように子どもや保育を捉えているか
畑中ルミ	子どもの人間関係と人的環境についての一考察—子どもの行動とクラス集団・保育者の保育観との関連から— 幼年児童教育研究	2017	1	クラスの仲間がつくる集団の規模や保育者の保育観などの人的環境が、子どもの人間関係を育てていく上で有意に関連していることを明らかにした。
			定義	子ども達へのかかわり方や何を大事にして保育を進めるのか
狩野奈緒子	子ども理解を基盤とした「保育観」「子ども観」の再構築—援助から保育の計画を描くための学び— 桜の聖母短期大学紀要	2018	2	学生の実習体験を通じた自らの計画と実践、省察の学びのサイクルと子ども理解に基づく援助を通して、自らの「保育観」「子ども観」を再構築するプロセスが確認された。

#### 4、結果

対象の論文を精査した結果、4つの保育観の定義が抽出された。(1) 保育における見方・考え方と定義。(梶田、杉村他1990、小原、入江他2013、他)(2) 保育における見方・考え方と定義した上で、「保育観」は変化するものとの捉え方(土橋2016、他)(3) 保育観を保育者の信念・理念とし普遍的な変わらないものであるとの捉え方(白石2013、山本2017、他)(4) 保育者の保育観を子どもの認識観、発達観、指導観、保育内容観、保育者の人生観等保育に含まれる観念形態の総称との捉え方(中1996、渡邊、永利2017)の4つの観点から保育者の保育観の研究を整理し傾向を見ていく。

#### 4-1 保育者の保育観の定義①

「保育の見方・考え方」という捉え方

小原・入江他(2013)は、保育者の保育観を「日々の保育の中であなたが特に大切に思っていること」と定義した上で、保育観を構成する概念(カテゴリー)を生成しその意味内容を明らかにしている。保育観のカテゴリーとして、子ども理解、発達の諸側面、保育環境、信頼関係・連携の4つのカテゴリーを生成し、幼稚園、保育園の職種別および保育経験年数別に分析しその傾向を明らかにしている。幼稚園教諭は、子どもの主体的な活動、子どもの対人関係など発達の諸側面を大切にしている傾向が高く、保育士は、子どもを理解すること、子どもの気持ちに寄り添うこと等子ども理解を大切に保育に

臨む傾向が高いことを明らかにしている。

森光 (2016) は、「保育者がどのように保育を捉えているか」を保育観と定義し、現在のようものの見方や考え方に多様性が見られるようになれば、当然価値観も多様化しているのが現状であると述べた上で、保育者が社会をどのように捉えているか現代社会に対応したひとつの保育観の在り方を明らかにしている。

白井・林 (2015) は保育者意識を「保育観」と定義し、保育観を考え、仲間と共有することの大切さを述べている。「エピソード記述を通して職場の保育者皆で検討する中で、色々な気付きを得る。職員がまとまる。保育に向かう力が湧く。といった好ましい流れが実際に生まれることが理解されてきたからではないかと述べ、それが保育の質の向上に繋がっていく」としている。

#### 4-2 保育者の保育観の定義②

保育観を「保育の見方・考え方」と定義した上で、それらは、時代の変化、環境の変化、さらには保育者自身の成長によっても変化するものであるとの捉え方。

増田・小櫃 (2014) は、「個々の保育者が形成してきた保育に対する見方・考え方」を保育者の保育観と定義した上で、「保育は、子ども理解に基づいた計画のもと展開されるが、子どもの自発性や主体性を重視した保育の展開において予測しない出来事に出会うことが前提であり、その予測しない出来事への対応が保育において重視される。つまりその場での判断が求められ、その判断は保育者が蓄積した専門的知識や経験をもとになされる。その判断の基盤となるのが、個々の保育者が形成してきた保育に対する見方・考え方である保育観が大きく影響している」としている。保育者がどのような保育観を形成していくのか、保育にさらには子どもの育ちにかかわる重要な要素である保育観は、変容するものであるとし、保育の省察において会話するもの同士が同僚性をもって応答的であ

ることが重要であることも示されている。

藤木・上田・若林他 (2011) は、認定こども園で働く保育者の保育観がそれ以前と比べてどのように変化したかを検討した結果、「1) 保育経験にかかわらず、より「子ども中心」の保育観に変化した。2) 保育歴の長い保育者はより「過程重視」の保育観へと変化し、特にそれは、保育所保育歴の長い保育者において顕著である 3) 保育所保育歴の長い保育者は「まとも重視」の保育観から「個性尊重」の保育観へと変化した。」として保育者は認定こども園移行に伴い自身の保育観を調整し保育観が変化していることが明らかとなった。

土橋 (2016) は、「どのような気持ちで子どもと関わるのか、どのような意識を持ち保育にあたるのか、保育に対しての見方、考え方」を保育観と定義した上で、自身の保育観について「保育の現場に入ると毎日の仕事に精一杯で保育者一年目の自分は、先輩の保育者にくっついて保育を実践するということを繰り返していた。今思い返してみると、自分の保育観はその時はあったのだろうか。先輩保育者についていく保育・・・それが自分の保育であると思っていた気がする」と述べ、「子ども自身の力を信頼する」ことは筆者の保育観の土台にあるが、この保育観は保育の現場で子どもと関わってから十数年たった時に心の中に現れたものであることを述べている。ここからも保育観は、時間の流れ、自身の経験から変化するものであることがわかる。

浅井・浅井 (2017) は、「保育理念や保育方針を念頭に置きながら、各保育士の保育観を元に保育が展開されている」とし、その保育観は保育士自身の性格や育ってきた環境、経験などで異なるものであり、新たに経験を重ね、自身の学びによっても変化していくものであるとしている。さらに保育観が変わるきっかけとして、責任感を挙げている。

芦田・秋田他 (2006) は、「暗黙的な実践知として作用しているもの、実践知の中心部分」



を保育観と定義した上で、保育観は、保育者養成課程、その国の幼児教育の歴史、社会状況、幼児教育に関するガイドラインによって変化するものであるが、通常明示的に意識化されている訳ではなく、日常の保育の中で実践知として暗黙的に作用している。としている。

#### 4-3 保育者の保育観の定義③

保育観を「保育者の精神・理念」と捉え、保育者の保育観は、変わることもない普遍的なものとの捉え方

白石（2013）は、保育者の倫理とは、保育をする上での判断基準であるとして、この倫理を保育観とし、「保育者の倫理は、自裁や社会変化によって多少変化せざるを得ない側面を持ち合わせているが、日常の保育の中でたびたび判断が揺らぐようでは、十分に責務を果たすことができない。」と保育観と保育倫理は直接結び付き価値観とも深い関係にあり、ある程度普遍的なものとして捉えている。保育者の倫理とは、保育者は現場でどんな判断をすべきか。と同義語であるとし、保育者の倫理とは保育をする上での判断基準である。と保育の見方、考え方を保育者の倫理とし、保育者の保育観と定義している。さらに保育者が専門的な倫理観に基づいて判断をするためには、保育観、子ども観、遊び観等専門的に学習、訓練して身に付けていくことが必要であるとしている。

田甫（2005）は、保育所保育指針や幼稚園教育要領の改訂を保育者がどのように受け止め日々の保育を実践してきたかについて、今までの研究から肯定的に変化（指針や教育要領の改訂等）を受け止めていたとしても、その内容を完全に理解し実践することにつながらないことを明らかにした上で、その背後には保育者が持っている「保育観」と「構え」があることを示唆している。保育観はどのように形成されるのかについて、思想や社会の変化、また養成校で受けた教育だけではないと考え、保育者のライフストーリーを通して思想や制度の変化に

よって自分自身の実践を変えなければならなかったとしても保育観や構えをかえることには結びつかず一貫性のあるものと位置づけ、さらに長い時間をかけて形成されるものであることも明らかにしている。ここから「保育観」や構えは、保育実践が変化することはあっても変わることなく一貫性を持ち保育者の根幹に位置づいていると捉えていることが明らかとなった。田甫は、保育の考え方や保育実践だけでなく、個人的な体験や自己のパーソナリティに関する事、人間性に至ることすべてが保育に収斂されるものと考えて「保育観」と捉えている。

#### 4-4 保育者の保育観の定義④

保育観を保育に含まれる観念形態の総称との捉え方

中（1996）は、『子どもの認識観・発達観・指導観・保育内容観・保育者の人生観等保育に含まれる観念形態の総称』を保育観と定義した上で、幼稚園教諭と保育士の保育観について、梶田らの保育観の5因子25項目より保育観の尺度を用いて保育者の特性、経験年数と保育観について調査した結果、両者とも「子ども中心、過程重視、子どもの興味・意欲重視」であること、また経験年数から10年以下群の指導者は行動面に特性の一端を見せ、11年以上群では遊び優先といった心理面への配慮に特性の一端を見せていると職種間に保育観の差異は見られないが、保育経験年数により保育観に違いがあることを明らかにした。

保育者の定義について、4つの観点から保育観を整理したが、保育者の保育観を「保育における保育者の見方、考え方」と捉えた上で研究分析を進めている傾向が見られること、また保育者の保育観には、時代の変化や環境の変化さらには自身の保育経験や人生経験によって変わるものという捉え方と変わらないという捉え方、それぞれ異なる保育観に対する捉え方が存在することも明らかとなった。

## 5、考察

保育者の保育観とその定義について考えてきた。保育者の保育観は、保育者の保育実践や援助方法を決定するのに大きく影響している。子どもと関わる上で重要な援助方法を決定する背後には、保育者の持つ価値観、知識、信念、個人的規範意識が浮かび上がる。保育者の持つ価値観は、生育環境、また保育者自身の生まれながらの性格により様々である。知識は、保育者自身が過去に受けてきた教育特にここでは養成校でどのような学びを得たのか、実習先である実習園でどのような保育を経験しどのような指導を受けてきたのか、勤務園がどのような保育を実践しているのか、保育経験さらに園内研修や外部研修の内容や頻度を考えても保育者の持つ知識は様々である。この価値観と知識が信念をつくり、この信念がどのような保育をしているかという個人的規範につながると思え、ここでいう価値観、知識、信念が保育における保育観に相当すると思える。

では、保育者は自身の保育観をどのようなプロセスを辿り意識していくのか。芦田、秋田他(2006)は、日常の保育の中で暗黙的な実践知として実践を規定している保育観を明示化するには仲間の存在を挙げている。白井、林(2005)は、「保育観」の概念として何を大事に保育をするかを認識し仲間と共有することが大事であるという概念、すなわち「保育観の共有である」としている。職員自身が職員同士は「仲間」であることを自然と認識できていることが保育の質の向上につながるとし、言語化できること、または非言語化なことを、保育を通して仲間と共有することで、パターンにはまらない臨機応変な援助ができると考える。と述べている。

奥山(2008)は、保育観を自覚するには、言葉にしていくプロセスが大切であり、それには仲間の存在が大きいことを明らかにしている。このプロセスには、他者や仲間と保育について語り合う時間や関係性が重要であると述べてい

る。

佐藤(2017)は、保育に正解はない。保育は日常行為の蓄積である。それを振り返るのはそれぞれの保育者の委ねられることが大きい、他者や仲間と保育を振り返る時間を持つことで、自分自身に対する考えを意識したり、言語化することが可能となり、よりよい保育につながるとしている。さらに他園や同僚という他者と自らの保育実践を比較することによって自身の保育観が浮き彫りになることも明らかにしている。

ここからも暗黙の実践知である「保育観」を明示化していく過程のひとつに、仲間の存在があり、仲間との語り合い、また自己や他者の保育実践を通して保育の見方、考え方について考えるきっかけになっている。保育者の保育観が暗黙知のまま存在した場合、当たり前に行っている事象を改めて考えることはきっかけに乏しく難しい。保育観を意識化することは保育を考え深めていく際の糸口となると考える。社会が変化し多様な保育観が存在する現在、保育は一人で行うものではなく複数でやっていくことの意味を考え、多様な保育に対する見方、考え方が存在するという、それは見方、考え方が違うからこそその多角的な視点で物事を捉えることができる。多様な見方、考え方を持っている保育者同士での語り合いは、時に苦しいこともあるかもしれないが、一人ひとりの持つ保育観が違うからこそ多角的に保育を見ることが出来、そこから新しい視点を獲得し、自身の保育観が意識化され、形成され、少しずつ形を変えていくものであるという考え方が存在することがわかった。その一方で、社会や環境が変化しても保育の中心である「子ども」は変わらない。子どもに寄り添うこと、子どもを理解すること、子どもの発達を捉えることは、保育所保育指針や幼稚園教育要領が改訂されても、子どもを中心に据えた保育の見方、考え方は変わらない。とする考え方もある。相反する二つの保育観の捉え方、保育の根幹として変わらない

ものとして存在し続ける「保育観」と、社会の変化、環境の変化、思想の変化、さらには保育者自身の保育経験や結婚、出産といった人生経験によって、色付けされて少しずつ柔軟に変化していく「保育観」が浮かび上がる。

保育者は、保育の根幹をなす変わらない保育観を実践の中心に据えて、その上に社会、環境の変化や実践経験や人生経験に応じて生まれた新たな見方、考え方である視点を取り入れ、少しずつ形を変えて変化していく保育観を積み重ねながら柔軟に保育観の意識化を行っていると考ええる。

保育の質の向上に向けて様々な実践や研究が行われている中で、保育者の保育観について考えていくことは、保育の質を考えるという点からも保育者の成長という視点からも意義のあることだと考える。

## 6、まとめ

日々子どもとかわり保育に携わる保育者は自身の保育観を意識化するために仲間や同僚と保育について語り合う場や関係性をもつことは大切である。幼稚園や保育所で1日の大半を共に過ごす保育者の保育観は、保育実践や援助方法に大きく影響する。ここから保育観の形成過程についてもこれから社会に出る未来の保育者である学生が、自身の保育観を意識することは重要なことである。保育観の形成や意識化を本人の意識に任せるのではなく保育観を形成できるように養成校として支援していくことが求められる。

さらに今後に向けて、社会の変動と保育者の保育観は連動しているのではないかと考え、社会全体の保育観と個々をもつ保育観との関係性についても今後検討していく必要があると考える。

## 引用・参考文献

1) 津守真 (1998) 「保育者としての教師」, 『岩波書店』, P166

2) 芦田宏、秋田喜代美他 (2006), 「多声的エスノグラフィー法を用いた日独保育者の保育観の比較検討—語頻度に注目した実践知の明示化を通して—」, 『日本教育方法学会紀要』, 第32巻, pp107-117

3) 増田まゆみ、小櫃智子 (2014), 「保育者の成長を支える子ども観・保育観の変容—実習生との保育の省察の一事例から—」, 『日本児童学会研究論文』, 93, pp3-13

4) 児島雅典、高杉展 (2003) 「学生の保育観の変容と授業構想」, 『松山東雲短期大学紀要』, 34, pp75-82

5) 佐藤智恵 (2011), 「保育者養成校で学ぶ学生のもつ保育観に関する研究—取得資格による比較より—」, 『幼年教育研究年報』, 第33巻, pp31-39

6) 井口眞美、生野金三他 (2013) 「教職実践演習の実証的研究～保育観・授業観の形成を目指して～」, 『実践女子大学生生活科学部紀要』, 50, pp21-38

7) 榎田二三子 (2017), 「2歳児保育における幼稚園教諭の保育観に関する一考察」, 『武蔵野教育学論集』, 1, pp1-9

8) 佐藤智恵 (2017) 「保育者は保育実践において何を大切にしているか」, 『福祉臨床学科紀要』, (14), pp73-80

9) 小原敏郎、入江礼子他 (2013), 「保育者の保育観に関する研究—保育経験年数、保育所・幼稚園の違いに着目して—」, 『保育士養成研究』, 第31号, pp57-66

10) 中俊博 (1996), 「保育者の保育観—幼稚園と保育所の比較からみた—」, 『和歌山大学教育学部教育実践研究センター紀要』, 6, pp129-142

11) 梶原正巳、杉村伸一郎他 (1990) 「保育観の形成過程に関する事例研究」 『名古屋大学教育学部紀要』 37, pp141-162

12) 藤木大介、上田七生他 (2011), 「認定こども園への移行が保育者の保育観に及ぼした影響」, 『梅光学院大学論集』, 44, pp11-21

13) 鳥光美緒子、中坪史典他 (2000) 「保育観

- の意識化とそれに果たすカンファレンスの役割—保育行為を内省するには—『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』, 第28号, pp39-48
- 14) 劉海紅、倉持清美 (2010), 「日本と中国の保育者の保育観」『東京学芸大学紀要、総合教育科学系』61,pp51-64
- 15) 劉海紅、倉持清美 (2013) 「いざこざを通してみた中国都市部と地方部の保育者の保育観」『東京学芸大学紀要、総合教育科学系』64,pp211-219
- 16) 劉海紅、倉持清美 (2014) 「中国都市部と地方部の保育者の保育観」『東京学芸大学紀要、総合教育科学系』65,pp365-374
- 17) 山本佳子 (2017), 「保育者論が学生の保育観にどのような変化をもたらしたか」, 『中国学園紀要』, (16), pp205-211
- 18) 渡邊望・永利陽一 (2017), 「保育観による保育行動の違い」, 『九州女子大学紀要』, 第54巻2号, pp177-191
- 19) 森光義昭 (2016), 「社会の変化に対応した保育観の在り方」, 『久留米信愛女学院短期大学研究紀要』,39,pp11-20
- 20) 白井はる奈、林悠子 (2015) 「対人援助者に求められる援助観：乳児保育における熟練保育士の語りを通して」『社会福祉学部論集』11,pp11-30
- 21) 土橋久美子 (2016), 「保育観と保育実践：「自らの保育観を問う」とは」, 『開花宣言、白百合女子大学児童文化学科』,8,pp30-36
- 21) 浅井かおり、浅井拓久也 (2017), 「保育士の保育観形成過程についての一考察—TEM図の分析を通じて—」, 『みらいの保育と教育—東京未来大学保育・教職センター紀要』, 特別号, pp1-5
- 22) 白石崇人 (2013), 「幼児教育」の理論とその応用②保育者の専門性とは何か」, 社会評論社
- 23) 田甫綾野 (2005) 「保育実践者の保育観や「構え」はどのように形成されたか—ある保育者のライフストーリーを通して—」, 『日本女子大学紀要』,11号, PP35-48
- 24) 奥山順子 (2008) 「保育者の資質としての「遊び」理解—保育者の「語り」にみる保育観形成過程—」, 『秋田大学教育文化学部研究紀要』,63,PP13-23
- 25) 森上史郎、大豆生田啓友 (2006) 「よくわかる保育原理」『ミネルヴァ書房』
- 26) 中村紘子 (2016), 「デンマークの『森の幼稚園』における保育観：『詩的ファンタジー』に着目して」, 『お茶の水女子大学子ども学研究紀要』 pp79-89
- 27) 綿貫由季子、武藤安子 (2004) 「高校生における保育観の形成とそれに影響を及ぼす要因—自我発達との関連で—」, 日本家政学会誌, Vol55,No2,pp135-144
- 28) 吉岡一志 (2007) 「保育士の成長を支える信念の形成過程—ある保育士のライフストーリーを中心に—」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第三部, 第56号, PP101-108